

2024年7月14日

説教題「キリストにありて『一つ』」ヨハネによる福音書 17章 20～23節

主任牧師 加藤 誠

「あなたがくださった栄光を、わたしは彼らに与えました。わたしたちが一つであるように、彼らの一つになるためです。」(ヨハネ17章22節)

先週は「神学校週間」のアピールをきっかけに「献身」について聖書から聴きました。バプテスト教会において「献身」は、神学校で学ぶ特別な人だけのことではなく、すべての教会員がバプテストを受けてクリスチャンになったその時から「この世に倣うのではなく、キリストに従う」ことを、日曜日だけでなく月曜日から土曜日までの暮らしの中で祈り考え続けていく、そのような「献身」に招かれていることを聴きました。特に最初期の英国のバプテストの人たちは、国民の大多数が「これが当たり前だ」と考えていた時に「聖書には何と書いてあるだろうか?」「イエス・キリストはどう語られているだろうか?」と、「人々のものさし」ではなく「聖書とイエス・キリストのものさし」を聴き従うことを選び取ったのです。先日、大谷恵護先生と話している時に、先生がアメリカのバプテストの人々にとても自由闊達なものを感じて、心惹かれた。その一つが、日曜日の礼拝の後のランチの時にこここで今日の説教のことが自然に話題になっている光景だったそうです。今日の牧師の説教が「良かった、悪かった」ではないのです。説教をきっかけにみんなが聖書の話をしている姿にバプテストを感じたと。わたしも「聖書がみんなの昼ご飯になっている光景」に心惹かれました。教会に来て、みんなが聖書を食べる。一週間の自分の「献身の糧」として聖書を大切に食べる。バプテスト教会の力はそこにあるのではないのでしょうか。私たちが各人が聖書を自分の一週間の「献身の糧」として食べることを大切にしたいのです。

この四月から福田美紀さんが東京バプテスト神学校の教会音楽科に入学して学びを始められました。最初の三年間は「本科生」、専攻科に進んだ段階で「神学生」と呼ばれるようになるのですが、東京バプテスト神学校は信徒として聖書を学ぶコースが整えられていますから、「本科生」にならなくても聴講という形で興味ある科目を学び、信徒としてよりよく教会の働きを担うという「献身」を深める学びも可能です。ぜひそのような学びの機会も考えてみていただきたいと思います。

さて、先週はそのような私たちの「献身」の深まりを願って、イエス・キリストがまずご自身をささげて篤く祈ってくださっていることをヨハネ 17章から聴いたのですが、先週触れることのできなかつた箇所を今朝は取り上げたいと思います。

20節から23節の短い箇所に「彼らを一つにしてください」「彼らも一つになるように」と、「一つ」という言葉が四回も繰り返されています。主イエスは弟子たちが「一つ」にされることを熱く祈られました。なぜか。この主イエスの祈りがなければ、

弟子たちはあつという間にバラバラになってしまう、信仰のもろい者たちだということでしょう。実際、十字架の後に弟子たちはバラバラになりうる危機に直面します。けれども踏みとどまった。なぜか。この主イエスの祈りと、またその直前の主イエスによる「洗足」があったからではないでしょうか。彼らは主イエスの「洗足」によって「一つ」にされていたのです。言い換えると「弱さ」において「一つ」にされていたということです。これは大切な点です。教会は一人ひとりの信仰の「強さ」ではなく、「弱さ」において「一つ」にされている。「弱さ」を主イエスによって受け止められ、洗われているゆえに「一つ」にされているのです。

またヨハネ福音書がここで示しているのは「父なる神」と「子なる神」の一体性です。父と子は別人格であり働きも違います。けれども「一つ」と言われる。それは「目指しているもの」が「一つ」ということです。暗闇あふれるこの世界で、神の栄光がはっきりと示され、人々の心に神への信仰が確かにされていくこと。人間の悪に打ち勝つ神の愛がはっきりと示されて、人々がぶどうの枝としてキリストの愛にしっかりつなげられていくこと。その目的と使命とにおいて父の子は「一つ」だということなのです。その意味で、教会は「弱さ」において「一つ」でありつつ、目指すもの、見つめるものにおいても「一つ」にされるように主が祈ってられることを覚えたいのです。

また新約聖書のパウロの手紙などに目を向けると、そこでも「一つ」の意味が興味深く語られています。第一コリント 12 章 12 節以下では、さまざまな個性と賜物を与えられている一人ひとりが、「一つ」のキリストの体を形づくるのに「無くてならない部分」であることが語られています。それゆえお互いは「あの人はいない」などとは決して言えない。油と水のように違うものを「一つ」のキリストの体として用い、生かされる聖霊の働きに信頼する信仰が求められるのです。またガラテヤ 3 章 28 節では「そこではもはや、ギリシャ人もユダヤ人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません」と、当時の社会のさまざまな偏見や差別のために分断され対立させられてきた人たちが教会で「一つ」にされる。神の前には平等で大切な一人ひとりとして共に歩むように語りかけられていますし、エフェソ 2 章 14 節以下では、敵対していた者同士が十字架により「敵意という隔ての壁」を壊されて「一人の新しい人」として造り上げられる平和にあずかるという意味での「一つ」が語られています。

つまり、このヨハネ 17 章で主イエスが教会のために祈られたのは、十字架を基とした「一つ」であり、多様性を失う「一つ」ではなく多様性を喜ぶ「一つ」であり、社会や私たち自身がつくり出している、さまざまな「隔て」を壊されていく「一つ」です。その主イエスの篤い祈りにおいて、大井バプテスト教会の私たちもここに招かれ、「キリストの体」として建てられています。私たちの交わりが、神の栄光を映し出すものとなるように祈っていききたいのです。